



ヴィクトリア朝英国小説における「書く」女性： チャールズ・ディケンズ、シャーロット・ブロン テ、ウィルキー・コリンズ、マリー・ブラッドンの 描く女性たち

宮川, 和子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2006-03-25

(Date of Publication)

2012-11-07

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3776

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003776>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 2 7 】

氏 名・(本 籍) 宮川 和子 (滋賀県)
博士の専攻分野の名称 博士(学術)
学 位 記 番 号 博い第632号
学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当
学位授与の 日 付 平成18年3月25日

【 学位論文題目 】

ヴィクトリア朝英国小説における「書く」女性
ーチャールズ・ディケンズ、シャーロット・ブロンテ、
ウィルキー・コリンズ、マリー・ブラッドンの描く女性たちー

審 査 委 員

主 査 教 授 齊藤 重信
教 授 菱川 英一
教 授 枝川 昌雄
助教授 山本 秀行
助教授 佐藤 光

博士論文・要旨

本論では、19世紀の小説に登場する女性たちの描写を通じて、女性が置かれている社会的状況を考察し、彼女たちの苦悩の根源を探る。登場人物としての女性のみならず焦点を当てるのではなく、女性作家にも注目し、女性作家の位置づけや意識のありようをも論じる。扱う作品はチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の『荒涼館』(*Bleak House*)、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Bronte)の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*)と『ヴィレット』(*Villette*)、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』(*The Woman in White*)と『ムーンストーン』(*The Moonstone*)、マリー・ブラッドドン(Mary Braddon)の『レディ・オードリーの秘密』(*Lady Audley's Secret*)である。

ディケンズは「徹底的に男性的な作家」(thoroughly masculine writer)というレッテルを貼られがちであるが、彼の代表作『荒涼館』は、女性問題を考察する上でふさわしい要素をいくつも含んでいる。エレン・モアズ(Ellen Moers)は、『荒涼館』がディケンズの代表的作品群の中で唯一の『女性問題』小説(‘woman question’ novel)であると論じている。大法官裁判所の不公正、公共の衛生問題、議会の悪政などのような問題と同様に、女性問題がただの脱線としてではなく、重要な社会問題として扱われている。さらに、『荒涼館』に登場する女性たちは一グループとして見ると、ディケンズが描く他の女性と比べてはるかに力強く、独立心旺盛であり、有能である。『荒涼館』では、19世紀半ばに社会に進出しつつある女性のエネルギーという事実への、ディケンズなりの姿勢を伝えているのだ。

第1章の「シャーロット・ブロンテとチャールズ・ディケンズの隠された対抗意識—『ジェイン・エア』から『荒涼館』そして『ヴィレット』へ—」では、当時女性作家がいかに男性作家を脅かしていたかを論じ、三作品に表れた両作家の対抗意識を探る。『ジェイン・エア』のジェインと『荒涼館』のエスタ(Esther)は、二人とも孤児であり愛情のない伯母に育てられ、ガヴァネスになるため寄宿学校に入るといふように、その境遇は酷似している。他方、二人の性格は正反対と言ってもよく、ジェインは、女性の情熱と反逆を具現したような女性であり、エスタは、従順な「模範生」である。ディケンズが、ジェインの人物造型に変更を加えて創造した人物がエスタなのではないかと思われ、ディケンズは『ジェイン・エア』を意識しながら『荒涼館』を執筆していたことが推測で

きる。

シャーロット・ブロンテは『荒涼館』を第4章まで読んだ直後、「気立ての良い性格が戯画化されており、忠実な描写を欠いている」とエスタに対する辛辣なコメントを友人宛の手紙に書いている。その後出版された『ヴィレット』のヒロイン、ルーシー(Lucy)のサー・ネームがSnoweであり、snowという語を含んでいることに注目したい。エスタのサー・ネームであるSummersonがsummerとsunと同音のsonで作られていることを考えれば、ルーシーの名前はエスタの名前をパロディにしたのではないだろうか。他にも『ヴィレット』の中では、『荒涼館』を意識して書いたと思われる箇所がいくつも見つかる。このように、両作家は相手の作品の模倣と変更という操作を通じて、暗に批判しあっていることが明らかとなる。実生活で自己犠牲性を余儀なくされることの多かった女性作家シャーロットが、「書く」という行為を通じて、大作家ディケンズと互角に闘っている。

次に、第2章の『荒涼館』における手紙と女性』では、作品中の全知の語り主に登場するレディ・デッドロック(Lady Dedlock)の手紙に焦点を当てる。彼女が昔、恋人のホードン大佐(Captain Hawdon)に書いた手紙の束は、人から人の手へ渡り様々なトラブルを引き起こす。こうした落ち着きのない手紙の動きは、レディ・デッドロックの不安定な人生を象徴しているようである。手紙が人から人へと移動し社会の秩序を混乱させる様子は、「解放された女性のエネルギー」に対するディケンズの反応がいかなるものであったかを暗示していよう。第2章では、レディ・デッドロックの書いた手紙に焦点を当て、作品の中での役割を考察すると同時に、ポウ(Edgar Allan Poe)の「盗まれた手紙」とも比較し論じる。

第3章『荒涼館』と『ヴィレット』—エスタとルーシーが語るトラウマの物語—では、エスタとルーシーを比較し、幼児期に精神的外傷を負った二人がいかに成長し、心の傷を克服したかを考察する。エスタは伝染病にかかり高熱にうなされている最中、いくつかの夢を見て本来の自己を探し当てようとする。病で顔が変わったことを契機として、洞察力が深まり社会批判をする立場に転じる。一方、ルーシーはアヘンの影響下、ヴィレットの夜の町を散策し自分の中の本質的なものに気づく。最終的に、ルーシーは学校経営に成功し経済的自立を果たすが、エスタは医師の妻となり家庭的領域に閉じ込められたよう

な印象を与える。しかし、エスタの語りには、世の中の偽善を糾弾するという傾向が残り、彼女が典型的な「家庭の天使」像には収まりきらないことを意味していよう。

第4章と第5章ではコリンズの『白衣の女』と『ムーンストーン』を論じる。コリンズは、女性が社会的に犠牲になっているという問題に対して敏感であり、そうした状況を描き批判したという点で、論じるに値する作家である。こうしたコリンズの小説の性格は、ゴシック小説の影響によるところが大きいであろう。コリンズがよく扱うテーマである「秘密、違反、非嫡出」(secrecy, transgression, and illegitimacy)は、ゴシック小説が扱ってきたテーマであり、とりわけ女性が書いたゴシック小説の伝統とかかわりが深い。1790年代に、ゴシック小説というジャンルを流行させたアン・ラドクリフ(Ann Radcliffe)のような作家たちによる女性のゴシック(the female Gothic)は、家庭内での女性の犠牲を反映したようなプロットを作り出している。つまり、ヒロインが幽閉される城は、家庭という悪夢のようなイメージと重なり、威圧的な悪党は男性的権威を表象するというように。

コリンズはゴシック的要素を含んでいるとはいえ、それは「女性の犠牲についての物語」を語っているだけではなく、「女性による転覆(feminine subversion)のプロット」をも併せ持っている。それは、フェミニズム批評家が19世紀の女性の作品に認めるパターンと似たものである。ギルバートとグーバー(Sandra Gilbert and Susan Gubar)は、『ジェイン・エア』を読み、荒れ狂い放火する狂女であるバーサ・メイソン(Bertha Mason)というゴシック的な人物を、ブロンテ小説のサブテキスト、すなわちテキストの背後に隠れた意味を表現するものと見ている。こうした隠れたサブテキストは、コリンズの代表的作品の中にも見出されるだろう。

第4章『白衣の女』における家父長制と女性一揺らぐ男女の境界線』では、男性性をもつ女性や女性性をもつ男性によって、男女の境界の揺らぎが見られることを考察する。さらに、「女性恐怖」をかきたてるアン(Anne)のような女性を通じて、男性中心的秩序を脅かす女性の「転覆力」について論じる。物語の最後に近づくと、ウォルター(Walter)が男性的秩序に接近し、家父長制を強化するという形で終わっているように思える。しかしながら、最後はウォルターが、物語の語り手という役目を再びマリアン(Marian)に譲るところで締めくくられ

ているため、この作品が、強いヒーローによる弱いヒロインの救済というような、単純な物語では終わっていないことを暗示している。

第5章『ムーンストーン』における帝国と女性一人種意識、階級意識、ジェンダーの揺らぎ』では、支配者対被支配者という構図の解体を論じる。この構図は、イギリス人対インド人、男性対女性、上流階級対下層階級という形で現れている。19世紀にあつて、当然と見なされていた二項対立が、ムーンストーン盗難事件をきっかけに揺らいでゆく。作品中、19世紀に支配的であった固定観念を覆す力をもったものは、たとえばロザンナ(Rosanna)の書いた手紙であり、植民地出身の母とイギリス人の父の血が流れているジェニングズ(Jennings)という医師の存在である。最後は、ムーンストーンの窃取が無意識の状態で行なわれたということが証明されてフランクリン(Franklin)は無罪放免となるが、こうした解決が真のハッピー・エンドをもたらすのだろうかという疑いについても論じる。

第6章『レディ・オードリーの秘密』における女性嫌悪と家父長制』では、「プロパー・フェミニン」と「インプロパー・フェミニン」というカテゴリーを用いて、当時女性に一定の役目を押し付けていた社会のあり方を論じる。重婚や放火、殺人未遂の罪を犯したレディ・オードリーは、狂気のレッテルを貼られ、精神病院に監禁される。狂女との烙印を押されて監禁されるというパターンは、『白衣の女』のアンや『ジェイン・エア』のバーサの場合と同様である。『ジェイン・エア』では、バーサが植民地主義の犠牲者であるという視点が欠けているが、『レディ・オードリーの秘密』でもレディ・オードリーが男性中心主義社会の犠牲者であるという視点が欠けている。彼女と赤ん坊を3年半も見捨てて、経済的危機に陥れたジョージの罪が何ら問われていないというのは不公平である。

ショーウォーター(Elaine Showalter)はレディ・オードリーの狂気について疑問を提示している。レディ・オードリーの秘密とは遺伝性の狂気のことなのだろうか。あるいは、狂気とは、単に女性の自己主張、野心、私利追求、不法行為に対して社会が貼り付けるレッテルのことなのだろうか、と。レディ・オードリーの狂気を通じて、社会が女性に押し付ける規範と、女性の本来の姿とのずれについて考察する。

このように6つの作品を読みながら、女性を抑圧する社会構造を検討し、そ

うした社会に対して女性が闘う様子を論じる。「書く」ことを通じて社会規範と闘うシャーロット・ブロンテは注目に値する。さらに、実在の女性作家のみならず、登場人物の女性たちも多かれ少なかれ「書くこと」によって生き延びようとしているという点で、女性作家の要素をもっている。『荒涼館』のエスタ、『ジェイン・エア』のジェイン、『ヴィレット』のルーシー、『白衣の女』のマリアンは語り手となることによって、自分の物語を書き、自己主張している。さらに『ムーンストーン』のロザンナは、フランクリンへ長い手紙を「書き残す」ことによって死後も行き続けようとしたのだ。『レディ・オードリーの秘密』のレディ・オードリーは自分に新しい名前を与えることによって、自分の新たな人生の物語を書き始めようとしていたのである。

論文審査の結果の要旨

氏名	宮川 和子
論文題目	ヴィクトリア朝英国小説における「書く」女性—チャールズ・ディケンズ、シャーロット・ブロンテ、ウィルキー・コリンズ、マリー・ブラッドンの描く女性たち
要 旨	
<p>本論文は、19世紀のイギリス小説に登場する女性と、19世紀のイギリス小説の充実を担った女性作家の双方に焦点をあて、19世紀中葉のイギリス小説という文学テクストの内側と外側の双方から、当時のイギリス社会の女性をとりまく状況を探ることによって、その女性の苦闘を支える文学テクストのありようを論じたものである。議論の対象作品は、チャールズ・ディケンズの『荒涼館』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』及び『ヴィレット』、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』及び『ムーンストーン』、マリー・ブラッドンの『レディ・オードリーの秘密』。いずれも、ゴシック小説的要素を含み、19世紀イギリス小説の豊饒を支える代表的小説である。</p> <p>第1章の「シャーロット・ブロンテとチャールズ・ディケンズの隠された対抗意識—『ジェイン・エア』から『荒涼館』そして『ヴィレット』へ—」では、女性作家の台頭が男性作家にとって脅威となりつつあった19世紀中葉のイギリスの文学状況を視野に入れ、シャーロット・ブロンテとディケンズとの間に潜在した対抗意識を探っている。ディケンズとブロンテの『ジェイン・エア』の関係については、先行研究の議論の足跡を検証しつつ、ディケンズが『ジェイン・エア』を読んだ証左とらえる形跡を『荒涼館』のテクストの中に探り出している。『ジェイン・エア』のジェインと『荒涼館』のエスタは、孤児としての境遇を共有しつつも、両者の性格は、前者の反逆的情熱に対し、後者の従順と、対照的であるが、その対照に、エスタの人物造形に際しての、ディケンズのブロンテに対する批判的意識を読む。さらに、ブロンテの『ヴィレット』のヒロインであるルーシーの姓に、『荒涼館』のエスタの姓への諷刺を読み取りうることや、両者に与えられるニックネームの類似に見られるアイロニカルな関係についても、先行研究の足跡を丹念に検証しつつ議論を展開している。さらにまた、『ジェイン・エア』、『荒涼館』、『ヴィレット』の3作品のすべてに、旧約聖書のエステル(Esther)記との関連を見いだすことに議論を展開し、エステル記への両作家の異なる姿勢に、両者の対抗意識を読む。こうして、3作品を比較しつつ、19世紀中葉のイギリスを代表する女性作家と男性作家の間の対抗意識を、彼らの文学テクストの行間にあぶり出している。</p> <p>第2章の「『荒涼館』における手紙と女性」では、作品中の一人の女性の手紙に焦点を当てる。人から人へと渡る、彼女の手紙の不安定な動きに、書き手の人生の不安定を重ね合わせる読みを展開しつつ、手紙の所有者が力を獲得すると同時に、その手紙に呪縛される存在になるという物語の動きに、ボウの『盗まれた手紙』との類似を読み、『盗まれた手紙』との比較へと議論を進める。その『盗まれた手紙』との比較においては、ラカン『盗まれた手紙』分析を議論の俎上にのせ、ラカンが提起した、「相互主観的な複合」たる三すくみの関係を、『荒涼館』にも見いだす。しかしながら、『荒涼館』は、『盗まれた手紙』と、共有する構造をもちながらも、一方で、その構造をはみ出る要素も併せもつことを指摘し、その構造を壊す役割を果たしているのが、登場人物の女性たちの非合理的情念であると、論じる。続く第3章は、「『荒涼館』と『ヴィレット』—エスタとルーシーが語るトラウマの物語—」と題し、『荒涼館』のエスタと『ヴィレット』のルーシーという共に神経症的傾向を有する女性の登場人物を比較し、幼児期に精神的外傷を負った二人が成長の過程で、いかに心の傷を克服したかを比較考察している。</p> <p>第4章と第5章では、ウィルキー・コリンズを論じる。コリンズは、常に、ディケンズと共に並び称される作家であるが、19世紀イギリス社会における女性をとりまく状況にディケンズ以上に敏感であり、その批判意識を、ゴシック小説的日常の中に展開し、社会批判を文学テクストの中に見事に溶かしこんだ作家である。議論は、彼の文学テクストから、そこに編み込まれた「女性の犠牲」と「女性による転覆」(feminine subversion)をあぶりだしていく。第4章「『白衣の女』における家父長制と女性—揺らぐ男女の境界線—」では、<男性>性をもつ女性や<女性>性をもつ男性の人物造形に、男女の境界の揺らぎを読み、男性中</p>	
主査記載 氏名・印	齊藤 重信

心的秩序を脅かす女性の「転覆力」について論じている。物語は、テキストの表層においては、男性が悲劇的状況の犠牲者たる女性を助けるという動きを示し、その動きは、一見、家父長制の維持強化への収斂を示しているが、『白衣の女』は、女性の語り手と男性の語り手との共同作業によって構築されてきた物語ともいえ、物語の最後では、その男性が、語り手たる役目を女性に譲る形で締めくくられている点に注目すれば、この作品は、必ずしも、強い男性による弱い女性の救済、ということの意味してはいない、と論じている。

第5章『ムーンストーン』における帝国と女性—人種意識、階級意識、ジェンダーの揺らぎ—では、女性への抑圧という問題を、支配者対被支配者という二項対立の構図の解体というより広い視野のもとで論じる。支配対被支配の関係を、人種や階級や男女といった諸相に確認しつつ、それらの支配・被支配の二項対立が、19世紀におけるイギリスとインドの関係の歪みの象徴的存在であるムーンストーンという宝石の盗難事件をきっかけに、顕在化すると同時に崩れていく過程を丁寧に検証している。『ムーンストーン』は、科学的検証によって真理を発見するという、いわば「理性の勝利」について語る物語に女性による「転覆」の物語が重ね合わされたものともいえる。論者は、その「転覆」のありようを丹念に分析し、ヴィクトリア朝社会が女性に強い理想像への抵抗や、階級社会における抑圧への抵抗を読み取る。

第6章『レディ・オードリーの秘密』における女性嫌悪と家父長制では、proper feminine と improper feminine という視点から、レディ・オードリーの狂気を通じて、社会が女性に押し付ける規範と、女性の本来の姿の齟齬について論じ、レディ・オードリーが、「プロパー・フェミニン」「インプロパー・フェミニン」という役割を意識的に使い分け、女性を単純に二分化する思想を逆手に取っていきなりありようを考察し、その思想の背後に、男性の女性への恐怖を見いだして、家父長制的権力の存在を探っている。女性に課された役割から逸脱する女性に狂気というレッテルを貼ることの背後に、女性に対する男性側の恐怖の潜在を読み、男性中心の制度の維持を計ろうとする男性社会の意図を読み議論を展開している。

本論は、以上の6つの作品を分析しつつ、登場する女性たちの多くが、「書く」ことによって、社会と対峙する姿勢を支えようとしている点を常に議論の視野に入れ、当時の女性にとっての「書く」と「生きる」との深い関わりを見いだしている。それは、登場人物の女性たちが生きる小説世界を支える文学テキストの中に、彼女たちの生の証としての小説世界が重ね合わされているといってもよい。本論は、そのテキストの重なり合いを浮き彫りにしようとしたものともいえる。

イギリス19世紀小説は、質量共に、イギリス小説史に大きな比重を占めており、その膨大な文学テキストの集積は、読解するだけでも、多くの労力を要するものであるが、論者は、そのヴィクトリア朝小説の中心に位置する代表的作品を研究対象の正面に据え、先行研究を絶えず視野に入れつつ、議論を展開した。しかも、その議論の際には、分析の道具を、アングロ・サクソンの世界が提供する道具にのみ依存するのではなく、論者は、ラカン、デリダ、クリステヴァといったヨーロッパ大陸の批評的<知>にも、貪欲な関心を示していて、その旺盛な関心の足跡は、議論の随所に見ることができる。もともと、先行研究の検証は、必ずしも十分とは言えない点もあり、また、20世紀に華麗な発展を示した新しい鋭利な批評道具についても、それらを十二分に使いこなせているとは必ずしもいえないが、しかしながら、文学テキストへのアプローチの仕方におけるその意欲的な研究姿勢は、ところどころに散見されるいささか不器用な議論を補って余りあるものである。

以上の結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者宮川和子が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	齊藤 重信	副査	助教授	山本 秀行
副査	教授	菱川 英一	副査	助教授	佐藤 光
副査	教授	枝川 昌雄			